

「全国育樹祭」開催の経緯

1 全国植樹祭（S22～）

「国破れて山河あり」。

戦いに敗れたわが祖国に残されたものは緑を失った森林と荒廃の極みに達した国土であった。

戦争資材確保のための緊急伐採に加えて戦後復興用材、薪炭供給のための伐採が続行された。

これらの過伐、乱伐により山の緑は失われたが、古くから木を植え緑を絶やさぬ民族といわれてきた日本国民から緑化思想は失われていなかった。

終戦直後の昭和22年、「荒れた国土に緑の晴れ着を」という全国民的な願いを実現すべく、「森林愛護連盟(現(社)国土緑化推進機構)」が結成され、皇太子殿下(今上天皇)をお迎えしての植樹行事(現全国植樹祭)の開催をもって戦後国土緑化運動が開始された。

翌23年には天皇皇后両陛下のご臨席を賜り、陛下自ら率先してお手植えされ、国民に範を示されたことが、国民に深い感銘と希望を与えた。

このことは、戦後復興への国民の働きを親しく励まそうと思ひ定めておられた昭和天皇の強い御意志であったと伝えられている。

2 全国育樹祭（S52～）

全国植樹祭をはじめとして、国民運動として展開された「国土緑化運動」は、28年を経過し、全国的に定着した。

また、国を挙げての造林政策の推進により、戦後の荒廃した国土の復興を昭和30年代に回復し、それに引き続き、薪炭林からの林種転換などにより、昭和50年代には900万haを超える造林地が造成された。

森林の造成は、植樹だけで完了するものではなく、その後の長い保護、保育によってはじめて完了するもので、森林資源の充実と森林の多面的機能の向上を図るためには極めて重要な分野である。

戦後の人工林の大部分は最も人手を要する過程にあるが、労働力不足、資金事情等のため保育作業が十分でなく、このため、国土緑化運動の推進の上からも育林(下刈り、雪起し、除伐、保育間伐、枝打、病虫害防除等)の重要性が強く認識された。

そこで昭和51年11月「全国育林祭」が国土緑化推進委員会と岐阜県との共催

により開催された。

全国育林祭は、平野三郎岐阜県知事の強い要望により、岐阜県、国土緑化推進委員会、林野庁の三者で検討され、開催に至ったものである。

その趣旨は、「現代社会は人間関係や、職場環境、人の和、協調など、いわゆる横の関係が強く要求されているが、反面、核家族問題をはじめとして、親と子や教師と生徒の断絶といったような、いわゆる縦の連携が弱められている。これを是正するためには、林業以外にない。林業は親が植え、その子どもが育て、孫が切り、そして植えて返すものである。そこで、植樹行事ならびに国土緑化大会で天皇皇后両陛下がお手植えされた木を皇太子殿下にお手入れをしていただき、育林・育樹の範を示していただこう」とするものである。

平野知事は、皇太子殿下をお迎えしての開催を熱心に要望されたが、今回は皇室をお迎えしないで行われた。

その後、関係者の協議の結果、名称は「全国育樹祭」とし、皇太子殿下のご臨席を仰ぐこととし、お祭り騒ぎにならず実効果を狙うものとする。と決定し、昭和52年9月に、第1回全国育樹祭が大分県で開催された。

以降、全国育樹祭は、春の全国植樹祭と並んで秋の重要行事として毎年、各県持ち回りで開催されている。

国土緑化運動五十年史（(社)国土緑化推進機構 編）から抜粋